

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第32回 伊藤至郎

哲学者を目指す

伊藤至郎は明治32(1899)年、印旛郡豊住村南羽鳥(現在の南羽鳥)に父源太郎、母いその次男として生まれた。

少年時代、読書好きだった至郎はカントの哲学入門書『プロレゴメナ』を読み、その内容に刺激を受けた。自分なりの哲学的な視点で書いた小説や論文を文芸雑誌『新潮』に投稿する中で、哲学を深く理解するためには数理論理学の知識が必要であると考えるようになり、大正7(1918)年に東京物理学校(現在の東京理科大学)数学科へ入学した。学校では講義の内容よりも、講師の学者・思想家としての考え方に感銘を受けた。

2年間の兵役を経て大正14年に学校を卒業した至郎は、中学の数学の教員となった。その傍ら、自身の興味の赴くままに文学、科学、歴史などさまざまな分野を分析・研究し、論文を執筆した。しかし同年、国では治安維持法が制定され、国民への思想・言論に対する弾圧が強くなっていった。

不遇の中でも道を貫く

生徒に対する言動や執筆活動により憲兵に目を付けられていた至郎は、職場への訪問を受けることもあり、学校を転々とする事となった。その中でも自分の考えを貫き通し、昭和7(1932)年には、さまざまな学問を科学的、論理的に研究することを目的とした学術団体「唯物論研究会」に参加した。研究会



学生時代に日々の出来事をつづっていた『長沼の日記』

明治32年～昭和30年(1899～1955)

印旛郡豊住村南羽鳥(現在の南羽鳥)に生まれる。東京物理学校(現在の東京理科大学)を卒業後、数学の教員となった。その傍ら、文学・科学・歴史などの分野において論文を執筆。戦時中、言論への弾圧が強まり退職に追い込まれたが、不遇の中でも執筆活動を続けた。著書には『数学概論』『鷗外論考』『鈴木雅之研究』などがある。



には広範囲にわたる分野の専門家が集まり、機関誌『唯物論研究』の刊行や研究集会を行った。

至郎は、昭和8年に反戦活動に参加したとして摘発され、学校を退職することとなった。それでも執筆活動を続け、同10年には、敬愛する森鷗外の研究を論文にした『鷗外論稿』を発表した。また明治初期に国の在り方を研究した同郷の国学者・鈴木雅之(広報なりた平成29年9月15日号)に共感し、彼自身の研究をするようになった。

昭和13年、学術団体への弾圧が厳しくなり、唯物論研究会は解散に追い込まれた。至郎は安房郡吉尾村(現在の鴨川市)出身の佐生光子と結婚するも、研究会のこれまでの活動が国に反するものであるとして仲間とともに摘発され、懲役2年余りの判決を受けた。

服役中に結核にかかった至郎は昭和16年4月に保釈となり、翌年、療養のため光子とともに長生郡一宮町に転居した。病床において精力的に研究と執筆活動を行い、数々の論文を発表した。そして長い闘病生活の末、同30年、56歳でその生涯を閉じた。

力を入れて取り組んでいた鈴木雅之の研究は昭和18年に完成したものの、存命中に発表することはできなかった。そして没後17年経った同47年、暗い時代に奮闘した夫を懸命に支えた光子の手により『鈴木雅之研究』として刊行された。

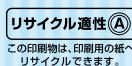
編集後記

毎月15日号で連載している成田ゆかりの人々。平成29年7月15日号から始まったこの企画は、次回の第33回をもって連載を終了します。取材に行く先々で「勉強になった」「いつも裏表紙を楽しみにしている」という声をいただくたび、多くの人に親しまれているんだなと身が引き締まる思いでした。4月15日号から始まる新しい企画も、皆さんに楽しんで読んでもらえるような連載にしていきたい。引き続き応援をよろしくお願いいたします。

令和2年2月15日号 No.1405

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。